台大日本語文研究第 33 期
2017 年 6 月，頁 29-48
2017-03-29 收稿，2017-04-24 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2017.33.29

「問題文藝」與早稻田派
—探討與日本自然主義的關係—

王憶雲*

摘要

大正四年（1915），作家中村星湖（1884-1974）在《讀賣新聞》上發表評論〈問題文藝之提起〉，表示當前的新文學應以心理描述為核心發展，之後「問題文藝」在文壇引起了廣泛的討論，「新文學」該何去何從，成為當年文壇最熱門的話題。不過，關於本課題之先學研究，數量鮮少。拙稿分析當年發表於報章雜誌的相關評論，聚焦於多位畢業於早稻田大學的文學家身上，如田中純、本間久雄、相馬御風等人，確認這個問題與明治後期的自然主義運動緊密相連，有其文學史上的意義；進而透過兩個角度深入探討，一是自然主義時代是如何使用「問題文藝」一詞，二是英國戲劇評論家威廉・亞契（*William Archer,* 1856-1924）的訪日，與他在早稻田大學的演講所帶來的影響。統整以上的探討與分析，發現「問題文藝」反映了繼承自然主義的年輕世代對於新文學走向的共同焦慮，包含複雜的面向。

關鍵詞：問題文藝、問題劇、自然主義、早稻田派、中村星湖

臺灣大學學術期刊資料庫

* 淡江大學日本語文學系助理教授

A Study of the “Issue Literature”（Mondaibunge） and Writers of the Waseda Group on the Relationship to Japanese Naturalism

Wang, Yi-yun *

Abstract

In 1915, the term “issue literature” used by Seiko Nakamura had provoked a heated discussion or debate on the relationship between literary works and social issues in the literary world. In fact, however, there exist not many studies that address this issue. This paper attempts to piece together the appearance of Japanese naturalism in Early Taisho by analyzing commentaries of this year, especially focusing on a number of writers who belonged to the Waseda group, such as Jun Tanaka, Hisao Honma, and Gyofu Souma. Through the above exploration, this paper confirms that the issue is closely related to the naturalism in late Meiji, and moreover, argues that the issue reflects the anxiety of young generation.

Keywords:Issue Literature, Problem plays, Naturalism, Writers of Waseda Group, Seiko Nakamura

臺灣大學學術期刊資料庫

* Assistant Professor, Department of Japanese, Tamkang University.

「問題文芸」と早稲田派
―自然主義との関係を通して―

王憶雲*

要旨

本稿は早稲田派を切り口にして、大正四年（1915）に文壇を賑わした「問題文芸」論争の文学史的な意義を考えたものである。

「問題文芸」論争とは、中村星湖が大正四年元旦の「読売新聞」に寄稿した「問題文芸の提起」によって起こった一連の議論を指す。この議論は、新文学のあり方をめぐったものである。「中央公論」や「新潮」などの主要雑誌まで「問題文芸」を特集しており、この年最も活発に言葉を交わされた話題である。そして、田中純、本間久雄、相馬御風ら早稲田派の若い世代も積極的にこの話題と関わっている。彼らの評論を手がかりにすると、彼より一世代前の長谷川天渓が示した理論とのつながりが見出される。また、島村抱月が代表した、明治四〇年（1907）頃の自然主義時代に見られる「問題文芸」への理解の仕方や、イギリスの文学者ウイリアム・アーチャー（*William Archer,* 1856-1924）の来日などの点からも検討し、その関係を明らかにする。以上の考察を通して、これまで指摘されていない「問題文芸」の一面を提示する。

キーワード：問題文芸、問題劇、自然主義、早稲田派、中村星湖

臺灣大學學術期刊資料庫

* 淡江大学日本語文学系助理教授

「問題文芸」と早稲田派
―自然主義との関係を通して―

王憶雲

一、はじめに

ゆまに書房から刊行された『編年体大正文学全集』(全一五巻、別巻一)は大正時代一五年間の文学の全貌を再現しようとする大きな試みである。各巻にその年の文学状況を縦覧・分析した解説が収録されているが、『第四巻大正四年』(平一三・一)に収録された十川信介の解説「一九一五(大正四)年の文学界」は、最初の子項目が「一、「問題文芸」の問題」で、その次が「二、問題小説と問題劇」である。十川氏の解説は、相当な紙幅を割いて、「問題文芸」の起源や実際の作品との連動を考察している。

この「問題文芸」とは、中村星湖が大正四年元旦の「読売新聞」に寄稿した「問題文芸の提起」によって起きた一連の議論を指している。作家でもあり、評論家でもある中村星湖の名は、現在ではほとんど忘れ去られているが、「自然主義主流に位置した、明治末期から大正初期へかけての中心作家[1]」であった。彼は、「問題文芸の提起」発表の前年に第四短篇小説集『女のなか』(大三・一〇)を早稲田文学社から刊行しており、当年の話題作として多くの人々から賛辞を寄せられている。この星湖が鼓吹した「問題文芸」は徐々に文壇の関心を引き寄せ、同年七月に「中央公論」が「大正新機運号」という題で、特集「問題小説と問題劇」を出すまでになった。さらに、九月には、「早稲田文学」と「新潮」も「問題文芸」を取り上げた特集を組んでいる。

十川氏の解説にもあるように、「問題文芸」は大正四年の最も重要な話題の一つである。しかし、この問題に関する先行研究は、それほど多くない。榎本隆司「「問題文芸論」について」(「国文学研究」

[1] 吉田精一「解題」(『明治文学全集』72、筑摩書房、昭四四・五、395頁)

臺灣大學學術期刊資料庫

22、昭三五・一〇）を除くと、吉田精一「大正期の社会と思想的環境」（『自然主義の研究』下巻、東京堂、昭三三・一）や「中村星湖」（『明治文学全集』72、筑摩書房、昭四四・五）、川合大輔「〈問題文芸〉論の位置と問題点―土田杏村の〈問題文芸〉論批判を手がかりにして―」（「哲学と教育」58、平二三・三）などしか見当たらない。

ここに先行研究の内容を簡略にまとめておく。榎本氏の論考は大正四年の評論壇の動きを緻密に分析し、その論争が「せっかく大きな課題として展開しそうな様相を呈しながら、けっきょく未分化なかたちのままで立消えていってしまった」と、この論争の文学史的な問題点を明確に提示している。吉田精一は「中村星湖」で、「問題文芸」に関わる星湖の発言を分析して、星湖において「徐々に社会意識に対する自覚がよび出されて来たことはみとめるべきだらう」と指摘している。一方、十川氏の解説は、個人と社会との相関関係に注目して、星湖に限らず、文学者が生きていた当時の社会背景を捉えようとしている。川合氏の論考は、「問題文芸」に関する土田杏村の発言を考察したものであり、この論争がほとんど取り上げられてこなかった原因の一つに、星湖に対する研究が未だ不十分であることを挙げている。

川合氏の指摘したように、星湖を取り上げる研究は極めて少なく、星湖の作品と彼の「問題文芸」の主張との関係には、ほとんど光が当てられていない。加えて、「問題文芸」という問題がなぜこの時期に現れてきたのか、またその文学史的な意味はどのようなものなのか。それを理解するのに榎本氏と吉田精一の論考だけではまだ不完全だと言わざるを得ない。

小稿の目的は、先行諸氏の論考を土台にし、これまでに指摘されていない「問題文芸」の一面を提示することにある。方法としては、早稲田大学出身の文学者がこの時期に発表した言説に注目することである。かくして、大正時代に起きた「問題文芸」論争と明治末期の自然主義との連続性を指摘し、自然主義者が持っていた問題の行方を突き止め、この論争の文学史的な意味を明らかにしようとする

臺灣大學學術期刊資料庫

のである。

二、田中純から長谷川天渓へ

問題の発端となった、星湖の「問題文芸の提起」を改めて見てみよう。

星湖は、イギリスの劇評家ウィリアム・アーチャー（*William Archer,* 1856-1924）が早稲田大学での講演で「心理劇は普遍的であり永久的のもの」と発言したことを踏まえ、「心理経過の如何が劇や小説の類の芸術の価値の根本となる」と主張している。星湖によると、芸術の創作者の目は人間の心理を見つめているという。そして、その目線は過去と現在の生活に留まらず「未来を見」ようとするべきであり、そうすると「作家の指が人間心理の原因や過程を指差すと同時に未来を指差してゐる事」になるのだという。このような創作過程で成り立った文芸こそが星湖の求める「未来の生活の為めの芸術」で、つまり「問題文芸」と称するものである。前述した通り、当時、星湖は既に小説家として、または評論家として文壇の中堅に位置づけられる存在であった。新文芸の旗印を立てようとしたとも解釈できる星湖の発言は、文壇で波紋を呼んでいった。

本間久雄は大正四年一二月に、同年の評論界を回顧して、「一度び『問題劇及問題小説』（中央公論）と云ふのが出てから、急に文壇の注意を惹き、諸雑誌は文壇諸家の問題文芸是非論を掲げるといふやうな具合で、本年の後半期は、この問題で最も多く賑はされてゐる観がある[2]」と書いている。本間久雄は、「中央公論」や「新潮」などの主要雑誌が大正四年の下半期に「問題文芸」を特集したことから、当年の下半期に「問題文芸」に関する議論が活発に行われたとしている。この判断には首肯できる。しかし、なにゆえ下半期になって「新潮」や「早稲田文学」のような文学雑誌だけではなく、総合雑誌「中央公論」の編集者まで「問題文芸」の重要性を理解し特集を組むことに赴いたのか。星湖の問題提起からそこに到るまでの

[2] 本間久雄「評論界一年の記録」（「文章世界」大四・一二）

臺灣大學學術期刊資料庫

過程はまだ明らかにされていない。

この章の結論を先に述べると、この年の前半に「問題文芸」の言説が膨んでいく過程において、田中純が重要な役割を演じているのである。

田中純は早稲田大学英文科出身の文芸評論家・小説家で、ちょうどこの年、大正四年に大学を卒業する。彼は卒業前から「早稲田文学」や「読売新聞」などの文芸関係の紙誌に評論を発表しており、卒業後は春陽堂に入社し、「新小説」の編集主任となった[3]。

「早稲田文学」大正四年二月号に田中純の「新しき幻影の要求」が掲載されている。純はその評論の中で、「吾々は今一度新しき問題文芸を興さねばならない」と、早くから星湖の論に同調し、〈新文芸＝問題文芸〉の論旨を打ち出している。この主張の背景には、「「人生の為め」を標榜して起つた、十年来の我が文壇の新傾向が、年を経るに従つてだんだんとその本来の要求から離れ、其当初の熱意を失つて、再びまた熱力に乏しい技巧の末技にのみ走つた芸術に返らうとして居る」と当時の文学状況に対して純は認識している。つまり、これは当時の文壇の状況を顧みた上での要求である。そして、純にとって星湖の問題提起は「此の一両年間の我が評論界に於て屢々繰り返される要求本位の態度や生の積極的創造の叫び声」であると同時に、「新しき幻影の創始に対する叫び声」であったという。さらに、彼は、「今一度旺盛なるリアリズムの精神に立ち帰つて、吾等の立つて居る現実の地盤を、今一度大胆に精細に批評し解剖せん」と、「問題文芸」の具体的方法を説き、「今一度現実曝露の偉大なる最後を通らなければならない」と述べている。

この〈リアリズムの精神〉とは何だろうか。また、〈幻影〉、〈現実〉、〈現実曝露の偉大なる最後〉などの言葉はいかなる意味を持つのだろうか。「十年来の我が文壇の新傾向」という田中純の言葉をヒント

[3] 代表作に「妻」(「人間」大九・五)、『闇に哭く』(大一三・六)などがある。また、彼の評論の仕事に関して、『日本近代文学大事典第二巻』(昭五二、講談社)に「大学卒業直後から評論、時評を多く発表している。徳田秋声論や、作品論にみるべきものがある」という評言がある(伴悦執筆)。

臺灣日本近代期刊資料庫

にして時間を遡ると、これらのキーワードは明治三九年以来の流行語であったことが認められる。それは、自然主義評論の指導者である長谷川天渓が「幻滅時代の芸術」(「太陽」明三九・一〇)、「現実暴露の悲哀」(「太陽」明四一・一)をはじめとした一連の評論の中に用いており、これらの言葉によって時代を導いてきた。天渓は明治三九年に、在来の価値観を意味する「幻像」がすべて消滅し、「何処を眺めても露骨なる実物のみ」が残っている現今、「人は一歩だけ本体に接近しつゝあ」り、「芸術は先づ進んで、幻像の再建に着手せざるべからず」と、時代を大きく動かすことになる発言をした[4]。そこから自然主義の文学を鼓吹していた。

> 宗教も哲学も、其の権威を失ひたる今日、吾れ等の深刻に感ずるのは幻滅の悲哀なり、現実の暴露の苦痛なり、而して此の痛苦を最も好く代表するものは、所謂自然派の文学なり。[5]

〈幻滅〉という事実を認識した文学者は残存した〈現実〉を見つめるしかない。その赤裸々な〈現実〉を〈暴露〉しようとしなければならない。そして、文学者はその過程において苦しまざるを得ない。このような主張を掲げる自然主義は、明治四〇年前後、文壇の最も勢力のある思潮となり、日本近代文学の〈リアリズム〉を深化させた。しかし、この運動は目を疑うほどの勢いで進んでいたが、明治四三年に「白樺」や「三田文学」を根拠地にした新しい文学の傾向が現れると、衰えの様相を呈しはじめたというのは周知の事実である。そのため、文学史では、新しい思潮の勃興で自然主義は姿を消してしまったとしばしば記述される。ただし、これは事実の全貌を語ったものとは言いがたいのである。

田中純は自然主義の流行から約一〇年後の大正四年に、天渓の名を示してはいないが、天渓の延長線上に立って、〈現実〉の「地盤」に帰ろうと、新しい〈幻影〉を求めんとする声を上げていることは明らかである。しかも、このような主張を掲げる評論は、この一点

4 長谷川天渓「幻滅時代の芸術」(「太陽」明三九・一〇)
5 長谷川天渓「現実暴露の悲哀」(「太陽」明四一・一)

臺灣大學學術期刊資料庫

のみではない。純はさらに「早稲田文学」の五月号に「幻影破壊の新意義」を発表している。ここでも、天渓の名を持ち出すことはないが、「日本に自然主義の運動が伝へられた時、吾々はそれを幻影の絶対的絶滅を叫ぶ運動だと思つた」と述べている。この説明から、〈幻影〉の系譜が明確に認められるのである。

三、本間久雄と相馬御風の発言

このように純の発言が自然主義の下で、あるいは天渓論理の下で成されたものであることは明白になった。しかし、ここで疑問が生じる。なにゆえ純は星湖の問題提起を早くから受け、積極的に〈新文学〉を語り始めたのだろうか。なにゆえ純は自然主義の脈絡においてこの問題を受け入れたのだろうか。この点はさらに追究せねばなるまい。

天渓が自然主義評論家の第一人者として活躍していた頃、明治二三年生まれの純が文学青年の一人として天渓の言説に影響を受けたことは、想像に難くない。しかし、天渓・星湖・純の接点は、それだけではない。早稲田大学こそがそのつながりの原点なのである。

日本近代文学の発展における早稲田大学の役割は特筆するまでもないだろう。むしろ、小稿はその事実を補足するものである。ここでは、早稲田大学出身の文学者をまとめて早稲田派と呼ぶ[6]。自然主義に限っていえば、最も重要な評論家である天渓も島村抱月も早稲田大学の前身、東京専門学校文学科の出身である。また、星湖は早稲田大学教授となった抱月の教え子であり、彼の小説「少年行」（明四〇・五）が懸賞に当選した際の選者の一人が抱月である。そして純は星湖より六歳年下で同じ早稲田大学英文科を出ているのである。

要するに、早稲田派の指導者（例えば天渓）が担ってきた自然主

6 「早稲田派」という言葉は自然主義運動の隆盛期にすでに見られる。例えば夏目漱石は講演「創作家の態度」（明四一・二）で学派に触れてこの言葉を使っている。また、総合雑誌「太陽」明治四二年一〇月号には早稲田派の小特集があり、島崎藤村や広津柳浪などが「早稲田派文士」に対する感想を寄せている。

臺灣大學圖書館期刊資料庫

義運動が下火になったあとでも、その若い世代（例えば星湖や田中純）は依然としてその行方を模索していたという事実が見て取れる。そもそも自然主義運動が下火になったというのは文学史の便宜的な表現にすぎない。

早稲田派の人物の中で星湖の問題提起に反応したのが純一人ではなかったことが、その裏付けになる。星湖と純の発言に続いて、当時「早稲田文学」を根拠地にしていた評論家、本間久雄も「問題文芸」を取り上げ、これを自らの目指す新文学として説いている。

> 吾々の要求するそれ〔稿者注：問題文芸〕はイブセン、トルストイ等の作に見る如く、それに含まれた問題が、一面直ちに人生そのものの根底に触れたものであると共に、一面直ちに「よき生活へ」の暗示を吾々に与へるものでなければならない。そして、このことを明確に意識して、それを創作の態度とするところに問題文芸提唱者の主張がある。[7]

この「「よき生活へ」の暗示」は、そのまま星湖の「未来の指示（指示とはならないまでも暗示）に富んでゐる芸術」という問題提起にある言葉[8]を踏襲したものと見ていいだろう。一方でまた、その内容として、純の「新しき幻影」と置き換えられる表現でもある。本間久雄は同評論において「問題文芸の出現――実際、自分なども、最も今の文壇に要求してゐるものは問題文芸の出現である」と表現するほど「問題文芸」を重く捉えており、後輩の純と同じ態度を示している。

相馬御風にもまた興味深い発言がある。彼は、抱月の教え子で自然主義運動が隆盛の折に積極的にその論理を敷衍していた評論家の一人である。御風は、「中央公論」が出した「大正新機運号」について、「格別の意味があつたやうに思はれないし」「掲載された作物にだつてさうして問題にするほどのものもなかつたとして思へない」と、「問題文芸」を社会的な問題に狭く限定する文壇の傾向に疑問を

7 本間久雄「文芸界の新人物」（「中央公論」大四・七）
8 中村星湖「問題文芸の提起」（「読売新聞」大四・一・一、一〇面）

臺灣大學學術期刊資料庫

示している。次に御風は、星湖が「生活そのものについての新しい疑問を読む人の心に持ち来らすやうな小説」を求めていると説明している。そして、御風は星湖の主張やウィリアム・アーチャーとの関係に理解を示しながらも、この問題を淡々と「僕らの生活を根底から動かし進める力となるやうな文芸さへ出てくれゝば好いんだ」と結論づけている。

御風の発言から、「問題文芸」は突如として現れた斬新なものではなく、彼らが絶え間なく文学そのものを追求し、満足のいく文学へ邁進する過程にすぎなかったことがわかる。それゆえ、御風は星湖の問題提起や敷衍を「問題文芸の提唱ではなくして、文芸の最高意義に関しての中村君の解釈に過ぎなかつた」と言っているのである[9]。

「わが国の自然主義文学を嚮導した最も早い時期の評論家[10]」である天渓は、明治三〇年に、東京専門学校文学科を卒業した。次世代の御風が早稲田大学英文科を卒業したのは明治三九年。星湖は明治四〇年。本間久雄は明治四二年。そして、田中純は「問題文芸」論争が起きた大正四年に卒業した。ここまで述べてきたように、この早稲田派の系譜こそが、「問題文芸」の性質を理解する際、見逃してはならないのである。

四、明治後期の「問題文芸」

この系譜をさらに具体的に見るために、「問題文芸」という言葉を星湖の問題提起以前へ遡ることにする。最初に「問題文芸」という言葉を使ったのは星湖ではない。この言葉は、自然主義が頭角を現した頃にすでに存在していたものなのである。

明治三九年五月、島村抱月は「白百合」に「問題文芸と其材料」を発表している。巻頭を飾るこの評論で、抱月はイギリスの問題劇（Problem plays）を「問題文芸」として論じ、この種の文芸作品の代表的な材料は「現在社会の秩序を維持する根本原理である所の形

9 相馬御風「問題文芸に就いての対話」（「新潮」大四・九）
10 瀬沼茂樹「解説」（『長谷川天渓文芸評論集』昭三〇・二、岩波書店、223 頁）

臺灣大學學術期刊資料庫

式道徳と之れに反抗する我等自然の欲望感情との最も強い対照若しくは最も烈しい衝突と云ふ方面」にあると指摘している。自我意識の芽生えと拡張の過程で個人が在来の価値観の束縛と対抗せざるを得ない窮境に、「問題文芸」の材料とその存在価値があるということである。一方、抱月はこのような「問題に触れる以上、解決の方向位は暗示すると云ふ意気込みがなくてはなるまい」と、作家に問題解決への努力があるか否かが作品の評価と深く関わっているとも述べている。島崎藤村が『破戒』を自費出版したのは、同年の三月である。抱月の評論は、自然主義運動の萌芽期に書かれたものである。そのため、明治四一年以降に定着した、長谷川天渓の「無解決と解決」(「太陽」明四一・五)などの評論に代表される日本自然主義の〈無解決〉論理はまだ見られない[11]。

「中央公論」明治四一年三月号に、「問題文芸」を新しい文学として論じる評論が掲載されている。それが松原至文の「風刺文と問題文芸」である。松原至文は明治四三年に早稲田大学英文科を卒業し、田中純と同様に在学中から「中央公論」や「文庫」などの雑誌に文芸評論を書き続けていた。その評論の冒頭を次に示す。

> 二千年来我等の手足を制縛して来た、道義、理想、信仰等に反撥して底の底から人間自我の叫喚を、文字に発した新芸術の一面が、やがてわが問題文芸である。

日本の自然主義運動が推進される過程においてしばしば見られることであるが、〈自然主義〉という言葉が揺るぎない内実を喪失して、ただ各々の論客が求める〈新文学〉を意味するものとして用いられているという傾向は、この至文の論からも窺える。彼の考えでは「近代自然主義上の新芸術たる問題文芸」は「時代の弊害を指摘する」もので、「大主観の声」、「全人類の代表的反撥の声」と見なすことが

[11] 天渓は文学作品の制作に際してただありのままを描写するだけで、「是非の言」を加えるべきではないと、自然主義の眼目として〈無解決〉の態度を説いている。この論理は「自然主義と本能満足主義」(「文章世界」明四一・一)から始めたものであるが、詳しくは拙稿「「芸術と実行」論争の発端—明治四十一年の長谷川天渓と岩野泡鳴との論争を中心に」(「京都大学國文學論叢」20、平二一・二)を参照されたい。

臺灣博碩士論文知識資料庫

できる。また、創作者が「問題文芸」を通して社会現象の原因を探り、弊害を指摘することに重点が置かれている。抱月の立場に同調するとともに、文芸の社会への影響力を重視するこの主張は興味深い。彼が実作の好例として挙げたのはやはり「イブセンのドラマ」である。つまり、その「問題文芸」への理解のもとには、問題劇が存在しているのである。

早稲田派を離れるが、「風刺文と問題文芸」の翌年に、生田長江は「問題文芸を論ず」(「新潮」明四二・五)を発表している。長江は、この評論で「芸術の内容をして」「実人生に近づかしむる」と同時に「文芸以外の社会をして、文芸に興味を持ち文芸に注意を払ひ、又文芸を尊敬する事を知らしむる」という目的を強く打ち出している。「問題文芸」は「実際上の目的を有して居る」もの、または「啓蒙的芸術」として必要なものであるという。彼は、このような見方が「世俗に媚びたやうにも取られ、衆俗に束縛されて居る考へのやうに思はれるか知らない」と承知しつつも、文芸を「衆俗」から脱却させようとした自然主義者と対抗するために少しも憚らない。この対抗は、前述した文芸の〈無解決〉に対する反発なのである。そして、大正四年にあらためて「問題文芸」への意見を求められた際に、長江は、「絶対に無理想無解決なる作品は到底あり得ない」と再び述べ、「特殊の時代特殊の社会に発生した特殊の問題」の重要性を指摘している[12]。

ここまで述べてきた内容をまとめると、明治後期の「問題文芸」言説は二つの文脈の中にあることが明らかになる。一つは、ヨーロッパ文学の問題劇が模範として見なされていること、もう一つは、社会的問題を摘出する役割である。この二点をそれぞれ、第五章と第六章で考察していく。

五、アーチャーの来日講演

ここでは、島村抱月や松原至文が口にした問題劇が、早稲田派の

[12] 生田長江「問題文芸の意義」(「新潮」大四・九)

臺灣大學學術期刊資料庫

人々の脳裏にあったことを、星湖「問題文芸の提起」を通して明らかにしていきたい。そこで重要な手がかりとなるのが、ウィリアム・アーチャーへの言及である。

明治四五年五月、ウィリアム・アーチャーは「英国第一流の劇評家として」来日した。その目的は「日本の風物人情に接する」ことに加え、横浜に滞在する妹を訪れることと、「日本第一の劇評家坪内博士に面会」することであると「東京朝日新聞」は伝えている[13]。当時の日本文壇は意欲的に西洋の文芸や思想を吸収しようとしており、イプセンの作品が広く読まれていた。イプセンの紹介者でもあり、英訳者でもあるアーチャーの来日は、日本文壇にとって外国文学と直接に交流できる画期的な出来事であった。島村抱月が率いる早稲田大学英文科は、坪内逍遙の文芸協会と連合してアーチャーのために歓迎会を開いただけではなく、彼に講演も依頼した。

アーチャーは六月二日午後、抱月の通訳で「演劇の将来」という講演を行った。彼は、「社会劇」と「心理劇」のそれぞれの特徴を説明してから、現在は「社会劇」を試みる作家が多いが、将来は「心理劇」がより重要になってくるだろうと説いている[14]。すなわち、劇作家が取り扱う課題は「社会の法律道徳習慣等に対する個人の葛藤」から「自然や社会に直接関係を持たぬ個人心内の葛藤」へと移動するという予言をしているのである。この予言は、星湖の問題提起を性格づけたものと捉えることができるだろう。その理由の一つは、アーチャーの講演の内容においても星湖の問題提起においても、人間の心理を描く作品が重んじられるという文学観が共通していることである。また、もう一つの理由に、アーチャーの未来への見通しが、星湖によって現在に対する主張にすり替えられていることがある。

アーチャーは講演の最後に、「日本の国民性は頗るドラマチツクに出来てゐる、加ふるに帝国主義物質主義家族制度伝統の固執等に対

13 「東京朝日新聞」明四五・五・四、五面。
14 「東京朝日新聞」明四五・六・四、四面。

臺灣大學學術期刊資料庫

する個人の葛藤及び従つて誘起さるゝ個人の内的事件などは益劇に対する好材料を提供する」と、日本の演劇に提言している[15]。逍遙と抱月はもちろん、星湖と御風もこの講演を聞いていた。本間久雄は「早稲田文学」の編集に係わっていたことから、おそらくその場にいただろう。この年に入学した純は、講演を直接聞いたとは限らないが、「読売新聞」や「東京朝日新聞」、あるいは同窓からこの講演の内容やアーチャーの主張に触れた可能性は極めて高い。一方、早稲田大学では、イギリス文学を専門とする逍遙や、ヨーロッパ留学の経験を持った抱月らが教鞭を取っていたため、学生がヨーロッパの問題劇やイプセンの作品から相当の影響を受けていたと考えられる。また、前章において説明したように、抱月や至文は問題劇を土台にして「問題文芸」を敷衍している。このような環境で、アーチャーの発言は早稲田派の青年文学者たちに絶大な重みを持つものとして受け入れられたのである。

一方、アーチャーの言説は、早稲田派の人々の中にある〈新文学〉への想像に影を落とすとともに、彼らの性格などによって変容されたとも考えられる。日本近代文学の成立過程にしばしば見られる時差の問題が「問題文芸」の場合にも存在している[16]。実際にアーチャーを目の前にして、その肉声を耳にしているが、星湖の脳裏には社会問題を越して心理問題へ赴くという予言が焼き付けられたのに対して、御風の印象に残ったのは、「オーソリティーと人民の関係とか、ミリタリズムと個人との関係とか、トラディションと個人との関係とか[17]」を描写せよという現実的な注文であった。このような結果に関しては、日本文学の〈現在〉に対する時間感覚のずれから生じたものだと稿者は捉えたい。

---

15 同注 14

16 たとえば石原千秋『あの作家の隠れた名作』（平二一・一一、PHP 研究所）は「ヨーロッパではロマン主義のあとに自然主義がくるのだが」、「明治二十年頃にヨーロッパの進んだ文学理論として自然主義が紹介され、そのあとにロマン主義がやってきた」とこの時差の問題を述べている。また、退廃的な文学思想が輸入された状況を例にして「大正文学においてもヨーロッパの文学との時差が起きていた」と指摘している（30~40 頁）。

17 同注 8

臺灣大學圖書館資料庫

六、個々の「問題文芸」として

第一章にも引用したように、「問題文芸」論争の全体的な評価について、榎本氏はアーチャーの主張に対する星湖の理解が不十分であり、さらには「「問題文芸」ということばの誤用」もあったため、この論争が「未分化なかたちのままで立消えていって」「不熟に」に終わったとしている[18]。確かに「問題文芸の提起」一篇だけを見ると、星湖の主張には不透明なところが多い。そのため、文壇の人々は各々敷衍して「問題文芸」を論じることになった。その結果、「問題文芸」論争は多義的なものになってしまったのである。

しかし、ここで強調したいのは、星湖のアーチャーに対する理解が間違っていたため、このような状況をもたらしたとは言えまい。「人間心理の原因や過程」に重きを置くという星湖の発言は、将来の文学へ目線を据えていたため、社会的な傾向を問題視しなかっただけだと説明できるだろう。稿者がこの問題を一種の時差が導いた「不熟」として捉える理由はここにある。

あらためて大正四年までの文学状況を考えよう。

「早稲田文学」九月号に掲載された特集「問題文芸の意義、価値及び形式」に、次のような編集者が無記名で書いた特集の趣旨がある。

> けれども我国文芸界は余りに盲目的である、余りにやりつぱなしである、多くの作家は観照の気分の甘き酔ひ、技巧の末の彫琢に心を奪はれてゐる。明治四十年を界とした新興文芸が最初のモツトオ「人生の為めの芸術」はいつか影をひそめて、知らず知らずに「芸術の為めの芸術」に流れようとしてゐる、さもなければ徒らに岐路に彷徨してゐるのである。最近文壇の一角に『問題文芸』の声の起りかかつてゐるのは、この嫌ふべき混沌沈滞の状能（ママ）を突破しようとする何物かの兆候ではないか？

この趣旨を通して、明治後期の自然主義が掲げた「人生の為めの芸

[18] 榎本隆司「「問題文芸論」について」（「国文学研究」22、昭三五・一、3頁）

臺灣大學學術期刊資料庫

術」という目標は、平面描写などの客観的な方法への後戻りなどによって、人生から遠ざかっていくことがわかる。また、当時の文学状況に対する認識は、この時期になっても文学の行方は未だ混沌の状態にあり、突破が望ましいという。これも、小稿の論旨を支える証拠の一つになる。つまり、星湖や純などの発言を見ると、彼らの抱く課題は、天渓や抱月などの前世代から連綿と受け継がれてきたものである。しかも、若い世代においては、共通の難題なのである。

小稿はここまで早稲田派に限って、〈新文学〉を求める彼らの姿勢を探ってきた。これでは、〈新文学〉への希求は自然主義傘下の文学者に限るという誤解を招くかもしれない。それは近代文学の誕生以来から、流派や出身校を問わず、文学者の胸中を去らない欲求であった。我々が実際に生きている〈現実〉へ回帰し、それを芸術の唯一の拠り所とすべきだという天渓らが掲げた主張は、明治四〇年頃から市民権を獲得してきた。しかし、社会から肉欲主義などと批判された後に天渓が唱えはじめた、「解決を付与することなく、有りの儘を眺むる[19]」という〈無解決〉は、〈現実〉に基づいた〈新文学〉への欲求という自らが設定した出発点と衝突している。そのため、早稲田派は自らの主張がもたらした矛盾を他の文学者より痛感したはずである。だからこそ、若い世代は〈新文学〉の行方を見出そうと、もがき苦しんでいたのである。

では、早稲田派から少し離れるが、東京帝国大学出身の評論家石坂養平の田中純「新しき幻影の要求」に反応した時評がある。彼は星湖「問題文芸の提起」も読んでおり、星湖や純の主張に対して同感を示すと同時に、次のように述べている。

> 思想家的風格を有する作家が社会人生に関する理想的様式を哲学的に把持して現実の世界に臨むときに初めて未来の生活の暗示を含んだ芸術、新しき幻影の世界を描いた芸術は生れるのである。[20]

[19] 長谷川天渓「無解決と解決」(「太陽」明四一・五)
[20] 石坂養平「二月の文壇」(「文章世界」大四・三)

臺灣大學學術期刊資料庫

石坂養平は純の用いた天渓の〈現実〉や〈幻影〉を踏襲しているが、「新しき」芸術の方法を哲学的思想に求めている。彼の論は、自然主義によって固められた〈現実〉の価値を認め継承したものであり、加えて、現在早稲田派が奮闘する姿勢に共感を示し、それを応援したものとしても読み取れる。

同年七月、石坂養平は「中央公論」の特集を読んだ後、「現今のわが創作界を見渡したところで真に人間生活の永久性に触れた問題文芸を作成し得るだけの可能性を具へた作家は殆ど皆無と云つてよい。その生活の積極的進転性や思想の実質的傾向から見て恐らく岩野泡鳴、中村星湖等の二三氏に過ぎなからう[21]」と記している。「問題文芸」の行方は、石坂養平の表現を借りると、それぞれの個人の「哲学的に把持」する方法によって決定づけられる。そして、いわゆる「生活の積極的進転性」、「思想の実質的傾向」を提示する作品こそが「問題文芸」の真価を持つものである。しかし、そのような作品を著し得る作家は泡鳴、星湖以外に見当たらず、その文学営為自体は非常に困難であるという。これが、評論家の大正四年の現状に対する認識である。

石坂養平の認識を通して、早稲田派のもがき苦しむ姿がよりはっきり見えてくると同時に、文学史研究における「問題文芸」の含む可能性も示唆される。小稿は早稲田派を糸口にして「問題文芸」と前世代の自然主義との関係を提示してきた。その一方で、生活において積極的な創造を求めるべきだという石坂の言葉を手がかりにすると、「問題文芸」論争と同時代の思潮との関係を考える必要性が浮上する。

七、むすびに

もう少し詳しく述べるなら、「問題文芸」と大正時代に流行してい

[21] 石坂養平「「問題小説と問題劇」を読む」(「時事新報」大四・七・二二～二五)

臺灣人學學術期刊資料庫

た生の哲学[22]との関係を探る研究が必要になるということである。生活の創造は、現実を重視するという主張とつながっていることは、想像に難くない。早稲田大学出身であるが、一般的には自然主義から離れた存在だとされている小川未明は「問題文芸」について、「自己の主観に立脚し、自己の信仰、自己の哲学に俟たなければならぬ。だから総ての問題は自身の生活にあると云つても差し支へはない[23]」と述べている。つまり、「問題文芸」は、自然主義との関係が明らかになった次のステップとして、石坂養平や未明の用いる「生活」というキーワードを通して当時の思潮との関連を考察するべきである。それを今後の課題としたい。

最後に星湖という創作者の立場に立ち返り、彼自身の「問題文芸」を考えて、それを結びとしたい。当時の「問題文芸」言説を全般的に見ると、社会的な実状を描いた文芸作品に限って論を進めるのが一般的であった。前述した生田長江の発言にしても、「早稲田文学」の「問題文芸」特集の巻頭にある編集趣旨にしてもそうである。社会問題を反映することが文芸の唯一の価値だとすると、「心理描写」を重んじる星湖の主張は、価値の低いものとされてしまう。しかし、あえて言うなら、一般的な認識と異なったところにこそ文学者星湖の独自性がある。つまり、アーチャーは明治四五年に「オーソリティー」、「ミリタリズム」、「トラディション」と個人との衝突などの問題が当時の日本に存在しているにもかかわらず、それを描く作品が少ないと指摘している。しかし、大正四年の星湖はあらためて問題を提起し、社会問題を描写する重要性を強調せずに、その時点で、現在のあるべき文学は「永久に個的、自我的である[24]」ものだと力説している。覚悟とも取れるこの主張にどのような要因や内部的必然性があるのだろうか。このような点からの考察によって、今後の

[22] 「生の哲学」の流行の背景に、アンリ・ベルクソンの哲学がこの前後に日本で広まっていたことがある。これに関連して鈴木貞美氏はこの時期に「生命」の語が氾濫していたことを指摘し、その現象を大正生命主義と名付けている。大正生命主義の特徴には、生命の創造的活動を重んずる傾向がある。

[23] 小川未明「総ゆる問題は自己の生活にあり」(「新潮」大四・九)

[24] 中村星湖「「問題文芸」の是非及び諸作家の活動振り」(「新潮」大四・一二)

臺灣日本語文學會資料庫

星湖研究がより進展することを望んでやまない。

【付記】引用に際してすべて初出に拠った。漢字は通行の字体を用い、ルビは略し、踊り字は適宜改めた。また、小稿は二〇一六年度台湾日本語文学国際学術研討会（二〇一六年一二月一七日、於新北市輔仁大学）における口頭発表にもとづいて加筆・修正したものです。席上、御教示賜りました林雪星氏、吉田妙子氏、横路明夫氏、日比嘉高氏をはじめ関係諸氏に厚く御礼申し上げます。

参考文献

石原千秋（2009.11）『あの作家の隠れた名作』（PHP 研究所）
榎本隆司（1960.10）「「問題文芸論」について」（「国文学研究」22）
川合大輔（2011.3）「〈問題文芸〉論の位置と問題点－土田杏村の〈問題文芸〉論批判を手がかりにして」（「哲学と教育」58）
瀬沼茂樹（1955.2）「解説」（『長谷川天渓文芸評論集』岩波書店）
鈴木貞美（1996.3）「「大正生命主義」とは何か」（『大正生命主義と現代』河出書房新社）
十川信介（2001.1）「解説　一九一五（大正四）年の文学界」（『編年体大正文学全集第四巻大正四年』ゆまに書房）
伴悦（1977.11）「田中純」（『日本近代文学大事典第二巻』講談社）
吉田精一（1958.1）「大正期の社会と思想的環境」（『自然主義の研究』下巻、東京堂）
吉田精一（1969.5）「中村星湖」、「解題」（『明治文学全集』72、筑摩書房）

臺灣大學學術期刊資料庫